

樋口 正美* 小林 秀之**

本校において「他動スライディング法」による点字導入期の指導が実施されることも多いが、実践記録として整理されることはない。そこで、本稿では2名に対するこの指導法を用いた導入期の指導内容とその結果について整理し、改めて他動スライディング法の有効性について検証することとした。

指導の結果、どちらの児童も適切なスライディングと良好な触圧で点字を触読することができ、1名は、2年生の2学期の始めには250マス/分程度の点字読速度を身に付けさせることができ、適切なスライディングや触圧が触読速度の向上に大きく関与しているのが確認できた。一方、触圧をコントロールする上で指導者の圧のかけ方への熟練の問題や、小学部においてこの指導法を適用した際の宿題を出しにくい等の問題を指摘した。

キー・ワード：他動スライディング法 点字導入期の指導 点字触読速度

1 はじめに

盲児にとって点字の習得は、学習を進める上で必要不可欠なものである。点字（文字）が習得できないということは、学習手段をもたないことになり、学習の積み上げが困難になるばかりでなく、学力も定着しないことになる。また、点字は習得した後も、読速度を上げるのに多大な時間と労力を要する。文部省（1995）及び文部科学省（2003）は、点字触読速度のガイドラインとして一連の初期学習が終了した段階では1分間に150マス/分、教科学習を普通に行う場合は300マス/分、効率的学習を行う場合は450マス/分、理想的には600マス/分と明記している。ただし例えば、佐藤（1984）は盲学校の小学部1年生から中学部3年生までの572名を被験者として、横断的な点字触読速度の調査を行い、点字触読速度は小1から小4までが急激に発達し、それ以降は緩慢になる事を明らかにしている。具体的な読速度は1分間にそれぞれ、小1で25.4文字、小6で149.9文字、中学3年で168.5文字であった。さらに、近藤・池谷・瀬尾（1990）はG盲学校の点字競技会の記録を整理し、最高の点字触読速度は、点字学習開始後12年目での239文字であったことを報告している。また、小林・水田・秋山（2002）は、H盲学校の指導記録と前述の文部省（1995）のガイドラインを比較して、入門期の一連の点字触読指導が終わるスピード（150マス/分程度）に到達するのは小学部1年生の終わりから2年生の1学期であり、教科学習を普通に行うスピード（300マス/分

程度）に到達するのは、小学部6年生になってからであることを示している。

以上のように点字触読速度は、報告により統一性がなく、これは点字導入期の指導方法とその後の点字読み速度向上指導の結果によるものと考えられる。

点字は習得したものの、点字一マスの上での指の上下動が生じたり、触圧が高くなったり、滑らかな点字触読は行われにくい状況（藤谷、1986；益田・楠原、1988；五十嵐、1993）が指摘されているが、これは日々、児童の教育に携わる中でも感じることが多い。このことを背景として、導入期から円滑な点字触読技術を習得させることを目的に開発された指導法が他動スライディング法（益田ら、1988）である。この指導法は、一連の学習の終了後に読速度が順調に向上することも利点として指摘されている（五十嵐、1993）ただし、益田ら（1988）の実践報告がなされて以降、五十嵐（1993）、静岡ビジョンの会（2000）、小林（2009）などによりこの指導法が紹介されているものの、実践報告については導入後の点字読速度向上指導に焦点をあてた小林ら（2002）をあげることができる程度である。実際に本校でも他動スライディング法による点字導入期の指導が実施されることも多いが、実践記録として整理されることはない。そこで、本稿では2名に対する導入期の指導内容とその結果について整理し、改めて他動スライディング法の有効性について検証することとした。

*広島県立広島中央特別支援学校 **筑波大学人間系

2 対象児の概要

本研究では、Table 1 に示した児童 2 名を対象とした。

A 児については、導入は本校幼稚部で 1 文字点字カードや単語カードを用いた点字の配置パターンを意識した指導を行った。そのため小学部入学時は、清音はほとんど読めているものの、触圧が高く、点字をこする音がするような状態であった。そのため、他動スライディング法による再学習を入学後の平成 25 年 4 月から実施した。

B 児については、小学部入学時は墨字での指導を開始した。視覚補助具の選定と活用指導も行ったが、視野が狭いため、学習や生活場面での使用になかなか結びつかなかった。さらに入学後 3 ヶ月の指導の後でも、墨字の読速度が伸びなかったため、点字への移行を検討し、平成 24 年 10 月頃から墨字の活用練習と並行して週 1 回 30 分程度の点字指導を導入した。平成 25 年 2 月の時点で正式に点字への移行を決定し、点字の指導は自立活動の時間を用い開始した。

Table 1 対象児童の実態

対象児童	性別	指導開始年月日 学年	眼疾患	視力値		
				右	左	両眼
A	男	平成 25 年 4 月 小学部 第 1 学年	先天性視神経低形成	50 c m 指数	0	50 c m 指数
B	女	平成 24 年 10 月 小学部 第 1 学年	頭蓋咽頭腫による 視神経圧迫	0.03	0	0.035

3 指導方法

基本的な指導方法は、他動スライディング法（益田・楠原、1988）に基づいて行った。この指導プログラムでは、盲幼児対象に週 1 回 2 時間（120 分）の指導で行われているが、本実践においては自立活動や国語科の授業で、基本的に週 4 単位時間（1 単位時間 45 分）の指導を設定した。他動スライディング法の概要については、Table 2 に示している。

この指導方法は、点字の字形をスムーズな横への触運動感覚のみで習得させることと、適切な触圧を保障できるという利点がある。また、自由に触読させると上下動

を生じる可能性が高いため I 期、II 期には、家庭学習をさせないことを基本としており、家庭との連携を十分に行った。

学習者の指の持ち方としては、基本の指導法には、「学習者の触読指を左手の親指と人差し指で持ち、他の指は手の甲を軽く握る。」とある。本指導でも基本的にはその方法で行ったが、児童が適切な触圧を理解できる I 期の途中くらいからは、指のみを持ち動かした。II 期で、不適切なスライディングをした場合は、対面して指を持ち、直ちに適切なスライディングを行った。

Table 2 他動スライディング法プログラムの概要

期	指導領域	指導項目	枚数	合格基準
I 他動スライディング期	1 清音	1) 学習行 1 文字読み	45 枚	正読率 100% 正読率 95% 正読率 85%
		2) 既習行 1 文字読み	45 枚	
		3) 既習単語 1 文字読み	200 枚	
II 他動・自動スライディング併用期	1 清音	1) 1 文字読み	45 枚	正読率 90% 1 文字 4 秒 正読率 90% 1 文字 2 秒 正読率 90% 1 分間 40 マス
		2) 単語読み	200 枚	
		3) 句読み	100 枚	
	2 促音・長音	1) 促音符・長音符	20 枚	正読率 100% 正読率 90% 1 マス 2 秒 正読率 90% 1 分間 40 マス
		2) 単語読み	100 枚	
		3) 句読み	50 枚	
3 濁音・半濁音	1) 1 文字読み	2) 単語読み	25 枚	正読率 100% 正読率 90% 1 マス 2 秒 正読率 90% 1 分間 40 マス
		3) 句読み	100 枚	
			50 枚	
III 自動スライディング期	1 復習	1) 1 文字読み	70 枚	正読率 100% 1 文字 2 秒 正読率 90% 1 マス 0.6 秒 正読率 90% 1 分間 80 マス
		2) 単語読み	400 枚	
		3) 句読み	150 枚	
	2 拗音	1) 単語読み	100 枚	
2) 短文読み	100 文			
IV 完成期	1 文章読み	1) 短文読み	100 文	1 分間 120 マス 1 分間 120 マス
		2) 長文読み	20 枚	

4 指導結果

(1) A児の指導について

① I期からⅢ期の指導結果

I期からⅢ期の指導までの指導結果をTable 3に示した。A児は入学時には、清音一文字が読めていたものの非常に触圧が高かった。このまま指導を続けていくと読速度が伸びないことが予想されたため、まず、他動スライディング法の指導に変更し、触圧を軽くすることに取り組んだ。

I期については、触圧が高いという課題はあったが、プログラム中「1清音1）学習行1文字読み」は実施せず、「2）既習行1文字読み」から開始した。指導者が力を抜くように声をかけ、点字に軽く触れる程度の状態にして児童の指を持って点字の上をスライディングさせた。児童も最初はそのようなスライディングでは、今までのように点字が読めないことが気になっていたが、指導者が「力を抜いて触ったら合格だよ。」と正しく読むことよりも触ることに評価の重点を置いた指導を継続した。触圧が軽くなったところで、正しく読むことを評価するようにした。その結果、1ヶ月ほどの指導で軽い触圧で点字を触ることができるようになり、Ⅱ期への移行もスムーズに行うことができた。

Ⅱ期の指導においては、「1清音2）単語読み」と「1清音3）句読み」において、長めの指導期間を要してしまった。これは、夏期休業中により、継続的な指導の実施が困難であったことも影響していると考えられる。Ⅱ期は、自動スライディングと他動スライディングとの併用期である。自動スライディングをさせながら、上下のジグザグ運動が出たり、触圧が高かったりした場合は、教師が他動スライディングで矯正するという時期である。この時期は、これらの指の動きを見逃さないような細かな観察が必要であった。特に「1清音」の指導中では、不適切な動きが出ることも多かった。特に、句読みになると指を横へスムーズに平行に動かすことが難しく、上下動が出てくる傾向が顕著であった。それらを丁寧に矯正してスライディングさせる必要があった。ただし、Ⅱ期の後半に入るとスライディングもスムーズになり、合格するまでの期間が短くなった。また、「3濁音・半濁音1）一文字読み」においては、自動スライディングに慣れた頃に再び、他動スライディングでの指導が入るので、適切なスライディングの学び直しとして、大変よい時期に

なったと感じる。本児にとっては、少し抵抗感があったのか、「一人でも動かせるけどね。」と言っていた。指導者から「丁寧な動かし方ができることが大切だからね。上手になるよ。」と伝え、「わかった。復習になるね。」とさらに適度なスライディングの重要性が本児に伝わったようである。



Fig. 1 A児 Ⅱ期 3濁音・半濁音

1) 一文字読み（他動スライディング）

Ⅲ期に入り、合格基準のタイムが速くなると、児童自身から「速く読めるようになった。」「すぐに読める。」「軽く読める。」などの感想が出るようになった。指導者も触圧の軽さとスライディングの良さを観察により感じることができた。

②完成期の指導方法と結果について

Ⅲ期までの指導の終了後、読速度をさらに高めるための指導を行った。指導方法としては、小林ら（2002）の事例研究を活用し、1回の指導で、同じ読材料を3セット音読し、その時間を測定するという方法で指導した。読材料は、200マス～350マス程度の1学年の読み物を使用した。また、ただ速く音読すればよいのではなく、内容理解を伴うことが必要であるため、1セット読む毎に、簡単な質問をして内容を把握しているかを確認した。Fig. 2にその結果を示した。

平成26年1月には、1分間に約100マス程度読めており、平成26年9月までの約7ヶ月間の指導で、初読で250マス/分程度の読速度に向上した。平成26年4月、2学年に進級した時点では約150マスである。点字指導の手引にも、入門期の学習終了時の読みは、150マス/分となっているため教科指導を行う条件を満たしているといえる。

③左手読みの指導について

Table 3 A児 点字触読指導進行表

期	指導月日 指導項目	平成25年										平成26年		合格セット数	1セット 平均枚数
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2			
I期	1-1)	前年度実施済み													
	1-2)	←→ 4/10~5/17										16セット	46枚		
	1-3)	←→ 4/16~6/7										22セット	30枚		
II期	1-1)	↔ 6/10~6/12										3セット	46枚		
	1-2)	←→ 6/10~9/18										28セット	40枚		
	1-3)	←→ 6/28~10/8										29セット	25枚		
	2-1)	◆ 8/30										1セット	20枚		
	2-2)	←→ 9/5~10/10										16セット	25枚		
	2-3)	↔ 10/9~10/17										6セット	25枚		
	3-1)	↔ 9/24~10/10										9セット	15~25枚		
	3-2)	↔ 9/24~10/17										17セット	20枚		
	3-3)	↔ 10/15~10/23										8セット	25枚		
III期	1-1)	↔ 10/18~10/31										15セット	25~45枚		
	1-2)	←→ 10/29~12/9										28セット	50枚		
	1-3)	↔ 11/6~11/22										8セット	50枚		
	2-1)	←→ 11/19~12/13										20セット	18枚		
	2-2)	←→ 11/19~1/7										24セット	10文		

左手読みについては、右手の読みが150マス/分になった平成26年2月の時点で、他動スライディング法による点字触読の導入を開始している。指導時間については、平成26年4月からは週1回の自立活動の時間を用いた。

I期1-1)やII期2-1)の指導については、指導を始めた段階で、すぐに読めたため、必要が無いと判断し、次のステップに進み、未実施とした。平成26年度9月までに、II期を終了した。

(2) B児の指導について

① I期からIII期の指導結果

B児は、第1学年の途中で墨字から点字への切り替えを行った。墨字での読速度は30文字/分程度から伸びず、平成24年10月より週1回30分程度の点字指導を開始することとした。この時点では、墨字の読み指導も並行して行っている。点字への移行を決定した平成25年2月から、平成26年3月までは、週4単位時間程度の指導を行った。また、平成26年4月に第3学年に進級してからは、週1回1単位時間の指

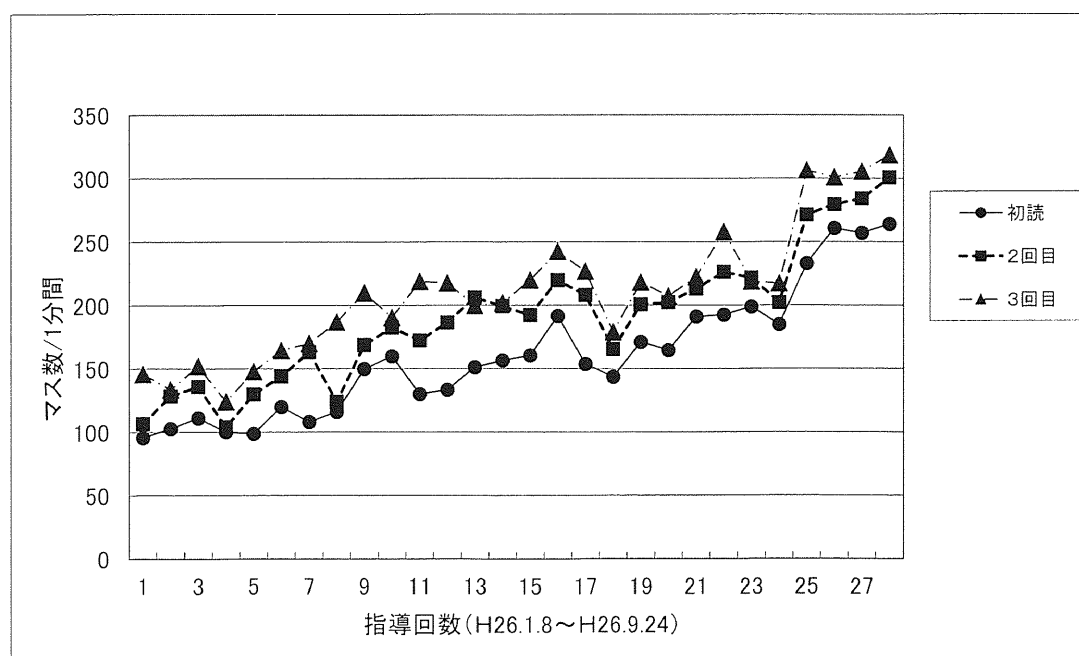


Fig. 2 A児 読速度の変化

導となっている。指導結果を Table 5 に示した。B 児は 1 文字読みから触圧を制御することに特に留意したため、触圧は軽く、スライディングもスムーズにできた。また、この指導方法の特徴でもある点字の字形をスムーズな横への触運動感覚で捉えることができ、「こは、ひらがなの『く』の形に似ている」や、点字の形を手で示しながら「この点字はこんな形」とたく

さんの気付きを出していた。

I 期の指導期間は、平成 24 年 10 月から平成 25 年 10 月までと、約 1 年要している。その原因としては、体調不良の期間があり指導が定期的にできなかったことや墨字との併用期間をとったため点字の指導時間が少なくなったこと、疾患による記憶の課題等と考えられる。この時期への対応としては、藤谷（1986）の

Table 4 A 児 左手読み点字触読指導進行表

期	指導月日 指導項目	平成26年									合格セット数	1セット 平均枚数
		2	3	4	5	6	7	8	9	10		
I 期	1-1)	未実施									1セット	46枚
	1-2)	←→ 2/4~2/10										
	1-3)	←→ 2/4~3/11										
II 期	1-1)	★ 3/11									1セット	46枚
	1-2)	←→ 3/11~7/10									14セット	40枚
	1-3)	←→ 5/1~7/10									8セット	50枚
	2-1)	未実施									7セット	25枚
	2-2)	←→ 6/30~7/14										
	2-3)	↔ 7/15~7/16										
	3-1)	↔ 9/4~9/11									3セット	25枚
	3-2)	↔ 9/4~9/16									9セット	25枚
	3-3)	↔ 9/17~9/24									4セット	25枚

10～15 文字程度を修得する時期に、既習文字にさかのぼって混乱が生じることがあるという指摘を受け、十分に時間をかけて丁寧に指導すると共に初期段階の指導に戻り再度確認指導をすることとした。さらに留意したこととして、指がとても小さく指導者が適切に指をガイドライン上に置かないと、6 点が指のはらに入らないということもあった。そのため、ガイドラインが指のはらに必ず一定に当たるように意識して他動スライディングを行った。指導者は、位置が正しいか本児に確認し調整するようにした。また、手首のみが動き、点字に対して指が扇状に動いて斜めに当たってしまうことが多かったため、指が点字と垂直に当たるように、腕の動かし方なども丁寧に指導を行った。

(不適切なスライディングを前面から他動スライディングで修正中)

II 期以降は合格期間が速くなった。B 児も「最近、(読むのが) 速いね。」等のつぶやきが多く出るようになった。平成 26 年 9 月には、III 期も終了している。

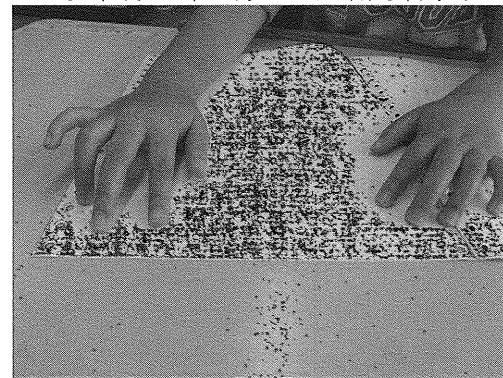


Fig. 4 B 児 III 期 短文読み

②完成期の指導方法と結果について

III 期までの指導の終了後、A 児と同様の方法で指導を行った。Fig. 5 にその結果を示した。

平成 26 年 9 月に、指導開始では、初読で 1 分間に約 70 マス程度で読んでいたが、7 回の指導で 120 マス/分程度に向上している。

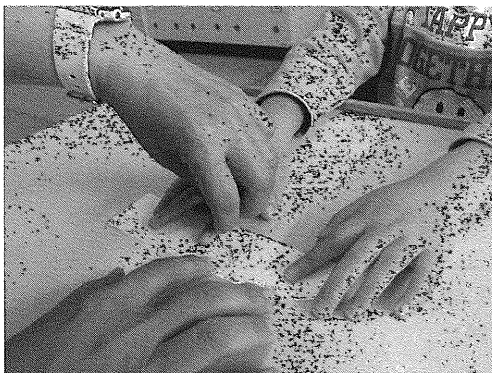


Fig. 3 B 児 II 期 2 長音・促音 3) 句読み

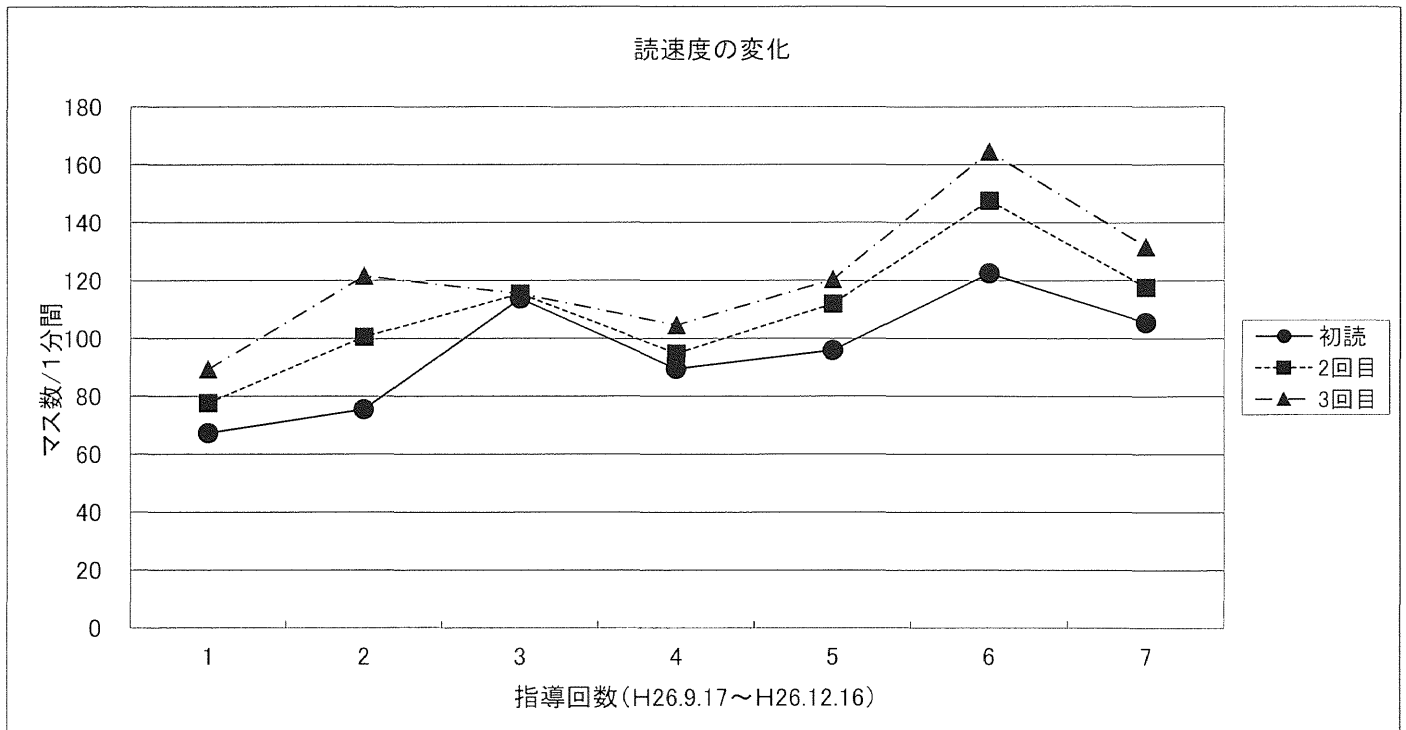


Fig. 5 B児 読速度の変化

6 まとめ

これまで筆者は、4名の児童に他動スライディング法を用いた指導を行ってきた。今回、新たに2名の児童の指導を同時期に行うことができた。その2事例の中で改めて感じたことを最後にまとめる。

全く実態の違う2名の児童を指導する中で、この指導方法が児童にもたらす効果を再確認することができた。例えば、プログラムには明記されていないが、I期は触圧の制御と適切な横へのスライディングを覚える時期であり、児童はそれとともに動的なイメージの中で点字を認識していく。II期は、児童自身が、横への適切なスライディングを制御できるようになる時期で、自分のスライディングが適切だったかどうかを判断できるようになる。III期はスライディングのスピードを高め触読できるようになり、児童も自分の触読がスピードを増してきたことを感じるができる。このように、それぞれの時期に、児童に学ぶことが分かりやすく伝わり、児童自身が主体的に学んでいく意識をもたせることができる指導方法であると実感することができた。その結果、児童自身の自覚とともに適切な触圧とスライディングを獲得できたと感じている。

この指導方法では、保護者の理解が必要である。指導の意図を理解して協力してくださった保護者の方々に感謝したい。

7 参考文献

- 五十嵐信敬 (1993) 視覚障害幼児の発達と指導. コレール社.
- 小林秀之・秋山努・水田奈緒美 (2002) 盲児の点字触読速度の発達に関する事例的研究-時間測定法による指導を通して-. 学校教育実践学研究、第8巻、87-92.
- 小林秀之 (2009) 視覚障害児の教育. 富永光昭・平賀健太郎編著、特別支援教育の現状・課題・未来. ミネルヴァ書房、296-303.
- 近藤一郎・池谷尚剛・瀬尾政雄 (1990) 点字読み書き能力に関する縦断的研究-点字競技会の得点を指標とした分析-. 心身障害学研究、第15巻、第1号、73-79.
- 佐藤泰正 (1984) 視覚障害児の読書速度に関する発達研究. 学芸図書.
- 静岡ビジョンの会 (2000) 全盲児のための指導計画モデル-国語編・算数編-. 静岡ビジョンの会、30-23.
- 藤谷みちる (1986) 盲幼児の点字指導法に関する一研究. 視覚障害教育実践研究、No.2、12-18.
- 益田真由美・楠原妙子 (1998) 他動スライディング法による点字触読指導. 視覚障害教育実践研究、No.4、1-10.
- 文部科学省 (2003) 点字学習指導の手引 (平成15年改訂版). 大阪書籍.
- 文部省 (1995) 点字学習指導の手引 (改訂版). 慶應通信.

Teaching of Braille Reading through the Guided Sliding Method in the Introductory Stage of Braille Learning

Masami Higuchi * Hideyuki Kobayasi **

* Hiroshima Central School for Special

** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba